

主婦たちのジェンダーフリー・バックラッシュ

— 保守系雑誌記事の分析から —

鈴木彩加

1 はじめに

男女共同参画社会基本法に対し、二〇〇〇年代前半に激しい批判や反対運動が行われた。同法は取り組まれるべき課題や法制化されたことによる限界が指摘されているが、「フェミニズムが獲得した歴史的成果」であるといえる(牟田二〇〇六:二〇二四)。この同法がすすめる男女共同参画やジェンダーフリー^①を「男らしさ・女らしさをなくす」「家族を破壊する」「伝統文化を否定する」と批判したのが、バックラッシュと呼ばれる動きである^②。

このバックラッシュは保守層の人々によって担われているとみなされているが、とりわけ、男女共同参画への批判は『産経新聞』を中心とした保守系メディア上で保守派知識人たち

によって展開されてきた。また、「新しい歴史教科書をつくる会」(以下「つくる会」と略記)や日本最大の保守系組織「日本会議」などの団体に属する人々が、自治体の男女共同参画条例に反対するために地方議会へ働きかけを行っている。

一方、バックラッシュには一定の主婦層が参加している。この主婦たちは主に草の根運動の担い手として地方行政レベルで活動し、「専業主婦を否定する」ものであると男女共同参画を批判している。女性の地位向上を目指す男女共同参画に対して、なぜ彼女たちは反対するのだろうか。また、このような状況は男女共同参画やフェミニズムにとってどのような意味があるのだろうか。

本稿の目的は、主婦たちがなぜバックラッシュに参加するのかを明らかにすることを通して、バックラッシュ内部の「家族の価値」に関するポリティクスを提示することである。そ

のために本稿ではまず、バックラッシュを概観し、先行研究で得られた知見からこれらの主婦たちをどこまで説明できるのかを検討する(第二節)。次に、男女共同参画に反対する保守系雑誌・会報・ミニコミ誌の記事を論者のジェンダーに着目して分析することで、主婦たちが何に関心を持ち、どの観点から男女共同参画を批判しているかを明らかにする(第四節)。そして、分析で得られた知見をもとに、主婦に着目した際のバックラッシュの全体像を提示する(第五節)。

2 バックラッシュの中の主婦たち

2・1 バックラッシュとは

バックラッシュ (backlash) とは「反動」や「揺り戻し」を意味するが、今日では特にフェミニズムに対する「攻撃」の意味で使用されている。本稿では、「ジェンダー平等(男女共同参画、ジェンダーフリー、男女平等、フェミニズムなど)の施策がすすむことに対する組織的な攻撃(反響、巻き返し、反動、抵抗)」という伊田広行による定義を採用し(伊田二〇〇六・二七六、二〇〇〇年代前半に登場した男女共同参画とフェミニズムへの批判や反対運動をバックラッシュとして扱う。

それでは、実際にどのような動きが見られたのだろうか。細谷実(二〇〇五)は、バックラッシュの「功労者」はかな

り明確に特定できるとし、『産経新聞』と大衆雑誌『正論』のサンケイ・メディアを挙げている。二〇〇〇年頃から『正論』及び同種の保守系大衆雑誌『諸君!』誌上で、男女共同参画やフェミニズムを批判する記事が頻繁に掲載されてきた。これらの記事では、基本法は「男らしさ/女らしさを否定し、日本の伝統文化を破壊する」、「専業主婦を否定する」といった主張が展開されている(伊藤二〇〇三・一一)。

このようなメディア上の動きは、バックラッシュを生産・再生産するための中核的機能を有してきたといえる。国会や地方議会で保守系議員が『正論』『諸君!』などに掲載された記事を元にして質疑を行い、その事実が再び記事にされ、結果として行政が委縮していくというプロセスが竹信三恵子(二〇〇五)によって指摘されている。

一方、運動レベルでは地方行政を舞台とし、基本法を受けて自治体で制定された男女共同参画条例が争点となった。既に条例案が制定されている場合、保守系議員に働きかけて条例の改正や廃止という戦略がとられた(千葉県)⁵。また、「男らしさ/女らしさ」などの男女の「特性」をあえて強調する独自の条例を制定する動きがみられた(山口県宇部市、千葉県市川市)。この他にも、条例の運用に一定の制限を課す請願の提出や採択運動も展開されている(鹿児島県、石川県、徳島県、愛媛県松山市)。

2.2 バックラッシュを担う主婦

バックラッシュの担い手の中には、一定の主婦層が存在しており、これらの主婦たちは特に草の根レベルで運動を支えている。例えば「日本会議」では女性版組織である「日本女性の会」が二〇〇一年に結成され、女性会員によって男女共同参画に特化した独自の活動が展開されている^⑥。また、山口県宇部市の条例制定には、「男女共同参画を考える宇部女性の会」などの草の根女性グループが運動の一翼を担った^⑦。彼女たちは、男女共同参画が専業主婦を否定する、というバックラッシュの主張を、主婦当事者の立場から発言していく役割を担っている。

先行研究においてこのような主婦の存在は早くから言及されてきた。例えば岡野八代は、バックラッシュの担い手を「彼女たち・かれらたち」と表現し、主婦たちが男女共同参画に対して「専業主婦であるわたしの価値を否定するのか」と主張していることに言及している(岡野二〇〇五:五六)。また、佐藤文香も、フェミニズムをバッシングする「普通の人々」である主婦層と若年男性層に対し、社会変化によってこれらの人々が抱く「自らの生の価値が否定されていくような疎外感」や「苛立ち」を男女共同参画やフェミニズムに向けることは適切ではないことを提起している(佐藤二〇〇六:二一六)。

2.3 主婦たちはなぜバックラッシュに参加するのか

これまでバックラッシュの担い手に関しては数々の言及がなされているが、こうした主婦たちの運動参加についてはどこまで説明できるのだろうか。先行研究によれば、バックラッシュの担い手は主に三つのモデルに大別することができ

る。まず、伝統的保守主義モデルが挙げられる。この層に属する人々は、「戦前の家族主義的国家観につながる」ような性別役割に基づいた家父長制型家族を理想とする人々である(伊藤二〇〇三:一五)。その典型とされるのが「日本会議」といった保守系団体であり、この伝統的保守主義モデルがバックラッシュの担い手を説明するために最も用いられていた。

バックラッシュに参加する主婦についてこのモデルが当てはまるのかどうかを考えてみると、確かに、主婦たちもまた何らかの保守系団体に属しており、保守主義的な側面はあると考えられる。しかし、そもそも保守主義だから男女共同参画に反対するのか、他の理由から反対しているために保守運動へ接続しているのか、その因果関係は明らかではない。

第二に、既得利益逸失モデルがある。A・カッド(2002)によると、フェミニズムを含む進歩的(progressive)社会運動へのバックラッシュとは、それらの社会運動によって制度の変更が試みられるときに既得利益を失う人々によって起

きる抵抗である。男女共同参画へのバックラッシュについても、性別役割分業などの女性の抑圧によって利益を得ている人々が支持しているとされている(竹信二〇〇五)。

日本でも二〇〇〇年代前半には小泉政権下で「主婦の構造改革」の名で配偶者特別控除が廃止され、また年金制度の第3号被保険者問題なども議論されており、佐藤(二〇〇六)が述べるように、これらがバックラッシュに参加する主婦たちの背景の一つであると言えるかもしれない。確かに、これら税制問題について主婦たちにとっては既得利益の維持という側面もあるだろう。しかし、社会保障問題への批判がなぜ男女共同参画への批判に集約されているのかは不明確である。

そして第三が、「不安」によってバックラッシュに動員される人々というモデルであり、「新しい保守主義」とも呼ばれる人々である(伊藤二〇〇三:一五)。この層の「新しさ」は、政治的理念によって思想の左右が決定するのではなく、個人が内包している様々な「不安」から草の根の保守運動に参加している点にある。彼らは長期不況による雇用不安、新自由主義政策の推進による社会福祉の切り捨てなどに起因する「不安」から目をそらすために、男女共同参画やフェミニズムを仮想敵としている(伊田二〇〇五)。

主婦についても、江原由美子はバックラッシュの背景として、「自らのジェンダー・アイデンティティを傷つけられる

ことに対する人びとの不安感や反感」があるとし(江原二〇〇七:一九二)、主婦が抱える「不安」について「既婚女性の多くが働くようになったことによって専業主婦であることに自信を失い不安になる」と指摘する(江原二〇〇七:一九〇)。このように、「不安」による動員というアプローチは主婦の参加を最も整合的に説明できているとも考えられる。しかし、漠然とした「不安」は、草の根のグループを立ち上げさせ、短・中期的に運動を継続させるほどの原動力となり得るのだろうか。

このように、バックラッシュの担い手に関する研究は主婦たちの運動参加について一部分では適格的であるが、説明しきれない部分も残る。そこで、本稿ではバックラッシュを担う保守系雑誌や会報・ミニコミ誌の記事分析を通して、主婦たちが何に関心を持ち、男女共同参画のどのような側面に対して問題意識を持っているのかを明らかにする。

3 データの概要

保守言説の分析に当たって、まずは用語の定義を確認したい。本稿では、執筆者が主婦であると自称している記事を「主婦たちのバックラッシュ」とし、主婦以外による記事を「主流派バックラッシュ」として扱う。バックラッシュに参加している主婦たちは、運動では傍流である。例えばいずれの雑

表1 分析記事件数

雑誌名		2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	合計
正論	主流派	5	0	14	15	6	15	9	5	0	69
	主婦	0	0	1	0	0	0	0	1	2	4
諸君!	主流派	2	1	3	4	0	1	5	0	0	16
	主婦	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2
日本の息吹	主流派	0	11	16	16	6	8	7	14	7	85
	主婦	0	0	0	0	2	2	0	0	0	4
日本時事評論	主流派	28	27	45	51	23	24	17	9	9	233
	主婦	3	0	0	0	0	0	0	1	0	4
明日への選択	主流派	0	0	2	13	9	5	6	4	0	39
	主婦	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
なでしこ通信	主流派	—	—	—	—	1	3	2	2	1	9
	主婦	—	—	—	—	6	29	29	27	23	114
	合計	38	39	81	100	53	87	76	63	42	579

誌・会報においても主婦自身による論稿はエッセイや座談会などの形でのみ取り上げられるなど、紙幅の割り当てに格差がみられる。このような主婦たちの非主流性を反映させるために、主婦以外による記事を「主流派バックラッシュ」としている。

分析に用いた

データは、『正論』『諸君!』『日本の息吹』『日本時事評論』『明日への選択』『本時事評論』『日への選択』の五誌である。いずれも、バックラッシュ言説を生産するメディアとして指摘されてきた雑誌・会報である(伊田二〇〇五、山口二〇〇六)。これらの雑誌・会報にバックラッシュの動きが最

も盛んに見られた二〇〇〇年から二〇〇八年までの時期に掲載されていた記事のうち、男女共同参画やジェンダーフリーを扱っているものを抽出した。また、記事内で男女共同参画やジェンダーフリーに直接言及していない場合でも、男女共同参画の特集内で掲載された記事も対象としている。

さらに、上記五誌に加え、主婦たちが草の根運動を主たる場として活動してきたことを考慮して『なでしこ通信』というミニコミ誌も対象とした。『なでしこ通信』とは、愛媛県松山市で男女共同参画に批判的な立場から活動している市民団体、「健全な男女共同参画社会をめざす会」(以下、「めざす会」と略記)の会報である。この会報には、他誌から転載した保守系知識人の論稿や会の活動報告、地方自治体の動き、新聞記事の紹介とそれに対する反論といったコンテンツに加え、上記五誌よりも主婦のエッセイが比較的多く掲載されている。二〇〇四年の創刊号から現在、第三七号(二〇一〇年十一月)までが発行されており、そのうち分析対象時期に該当したのは創刊号から第二五号までであった(記事件数は表1を参照)。

「めざす会」とその会報『なでしこ通信』を主婦たちのバックラッシュを分析する素材として選んだ理由は、次の二点にある。第一に、男女共同参画に限定して今日まで活動を継続している草の根団体は多くはないなかで、「めざす会」は発足当初からの活動内容を維持しており、草の根の主婦のバ

ツクラッシュユとして一つの典型と言える。第二に、女性という立場を強く打ち出した活動を行っていることが挙げられる。会長・事務局長には女性が就いており、女性が中心となつて活動を行っている。入会は男女を問わないというスタンズだが、定期的に開催している学習会は、「女性の生き方に関することが多いため、女性の集まりやすい昼間にあえて」設定しているとする(『なでしこ通信』第三号、二〇〇五年)。これらの理由から、『なでしこ通信』はバックラッシュユに参加する女性たちの主張の論拠を探るのに適切であると考えた。

4 「家族の価値」に関する比較分析

4・1 主婦による投稿記事の「非政治性」

まず、主婦による投稿記事を概観した際、複数の記事に見られる共通点があった。それは記事に一見すると男女共同参画批判とは無関係とも思われる「非政治的」な内容が記述されていることである。例えば、「母親への感謝の念を指導してくれそうな教師もなかなか見当たらなくなる」としてジェンダーフリー教育を批判するエッセイでは、同時に次のようなエピソードが記述されている。

私の心に残っている「母の日」の思い出がある。毎年、

小学校で「母の日」が近くなると、造花のカーネーションのブローチが注文販売された。子供の小遣いで買える数十円のものだったけれど、私は毎年、それを購入し母に渡していた。母はいつも殊の外喜んで、その日は一日中、胸に飾っていた。(三重の主婦えみ子二〇〇七)

このように、男女共同参画を批判しながらも、家族に関する個別具体的なエピソードが挿入されている記事が複数見られる。主婦による記事では一二八件中六九件で家族への言及が見られるが、『正論』では四件中一件、『日本の息吹』では四件中二件、さらに『日本時事評論』では四件すべてにこのような記述がみられた。また、『なでしこ通信』では一九件該当した中で、このような家族に関する記述だけで構成されるエッセイが十一件掲載されている。

そこで以下では、主婦による投稿記事に頻出する家族に関するエピソードに着目し、「家族の価値」という観点から主流派と主婦の比較分析を行う。それというのも、主流派バックラッシュユにおいても「家族」は重要なキーワードとなっており、先行研究でも指摘されてきたように「家族破壊」「家族の否定」「家族の解体」などの表現で、男女共同参画が家族を破壊する、という主張が展開されてきた。そのため、「家族」に着目することで、両者の内実が明らかになると考えられる。

4・2 主流派バックラッシュにおける「家族」

主流派の記事では四五一件中三三二件で「家族」への言及が見られ、それらの記事では「家族の危機」が頻繁に説かれているが、中でもとりわけ重視されているのが「家族の絆」として表現されるような共同性である。二〇〇〇年代前半には、男女共同参画と関連させて選択的夫婦別姓制度導入への批判がなされているが、ここでは夫婦別姓制度とは「家族解体」であり、「親子関係を脆くさせ、絆が弱くなり」、その結果として個人が「孤立化することを意味する」という論理が用いられている(林二〇〇二a)。同様の批判はこの他にも、日本時事評論社(二〇〇二)、日本政策研究センター(二〇〇三b)など複数の記事に見られる。

しかしながら、「家族の危機」が謳われてはいるものの、主流派バックラッシュの記事からは「家族」が社会秩序や国家の維持という点において重視されていることがわかる。例えば、『日本時事評論』では『家庭崩壊』『家族解体』＝『社会秩序破壊』という図式が用いられている(日本時事評論社二〇〇〇)。この記事は、当時山口県で制定の動きがみられた男女共同参画条例に対し、女性の社会進出を推進すること「で家庭での育児の担い手がいなくなり、「家族解体を容認する」と批判している。「家族解体」と「社会秩序破壊」が同義であることに加えて、「家族」の問題が社会の問題に直結

すると考えられている。このように家族と社会・国家を同一線上に捉える論理は九六件の記事で用いられていた。

この論理展開を可能にしているのは、夫婦別姓制度は「国家の基礎である家族を掘り崩すイデオロギーを有している」と述べられているように(八木二〇〇一)、家族は社会や国家が成立するための「基盤」であるという見方だ。また、林道義もジェンダーフリーを、「家族という、社会の細胞とも言うべき重要な単位を崩し、破壊しようとしているところに危険性がひそんでいる」としている(林二〇〇二b)。

以上のように、主流派バックラッシュの記事では一見すると「家族」が重要視されているように見えるものの、それは社会や国家を論じていくための導入に過ぎないといえる。

4・3 主婦たちのバックラッシュにおける「家族」

他方、主婦による投稿記事では、家族の中で生じた具体的な出来事を記述することによって「家族」が描かれている。

我が家の三女は障害児である。生後一〇カ月の時には重度と言われたが、両親と主人に励まされて三女の療育を最優先してきた。姉娘達は寂しさをこらえて明るく育ってくれた。今も彼女は障害児であるが軽度になっただけ(中略)三女が生まれてくれたことで、家族の大切さをことさらに感じるようになった。両親のありがたさ、両親に連なる先祖

への思い、そして何より、三女の障害に微動だにしかかった主人の頼もしさ。私は感謝を込めてこの家族を守りとおしていきたくも思っている。(四十代女性会員二〇〇五)

このエッセイは「家族とは」というタイトルが付けられているが、「家族とは何か」という定義付けや意義ではなく、筆者の体験した家族に関するエピソードが記述されている。

さらに、主婦によるいずれの記事においても、家族に関する記述は特に人間関係に焦点が当てられている。「小二の長男と小一の次男は学校から帰ってきて、一時間くらい学校の様子を話し、満足した後、次のことにかか」として、子どもの話をじっくりと聞いてあげるなど「子供や主人に対してゆとりを持って接すること」が「専業主婦の利点」として挙げられている(松山市主婦、二〇〇〇)。また、姑の死去という出来事を扱ったエッセイでは、姑・大姑と同居していたときの様子を「子供たちは青菜の煮びたしや茄子の煮たのを我慢して食べたし、大姑も両親もハンバーグや焼肉を何も言わずに食べてくれた」というように、食事の風景を用いて例示されている(梅岡二〇〇六)。

これらのエッセイからは、主婦たちの念頭におかれている人間関係について二つの特徴がみられる。第一に、執筆者の主観的人間関係で記述されていること、第二に、家事や育児・介護を媒介した関係性として捉えられていることである。

家族に関するエピソードでは、登場人物はすべて「娘」「大姑」「長男」「三女」といったように執筆者を基点とした際の名称が用いられている。このような特徴は主婦による他の記事にも共通しており、「母親」「父親」「子供」といった客観的な関係名称が使用されていないために、「母親はこうあるべきである」というような規範的主張には結びついていない。さらに、他の家族構成員とはただ血縁関係があるというだけで繋がっているとはみなされていない。料理を「食べてくれた」、話を「聞いてあげる」というように、投稿者自身が担う家事や育児・介護を介して関係し合うものとして、また、好みの異なる複数の世代が同居することから互いの配慮が必要とされるものとして、家族の人間関係が描かれている。

そして、主婦たちはこのような家族の人間関係に関する見地から男女共同参画を批判する。『なでしこ通信』では、愛媛県が発行したガイドブックへの反論が特集されているが、その中では次のような記述がみられる。夫婦や家族とは「たがいが愛情に結ばれ、それぞれが生活と運命を共にする者として支え合い、助け合う関係」であり、「生活も経済も夫婦が相手に依存していない」というのは事実上は夫婦と呼べない(健全な男女共同参画社会をめざす会二〇〇五)。

以上、主婦による投稿記事からは、男女共同参画が家族の人間関係に対する「脅威」として捉えられているといえる。家事や育児、相互配慮を介して築かれる家族の人間関係の維

持が重視されており、これらの主婦たちが男女共同参画を批判するのは、社会や国家の問題に主眼があるためではない。

5 バックラッシュの構造

5・1 潜在化された対立関係

前節では、バックラッシュに参加しているもの主婦たちは家事や育児などのケアを介して築かれる家族の人間関係に対する「脅威」として男女共同参画を捉え、社会や国家の問題に主眼があるのではないことを明らかにした。それでは、この主婦たちの論理は主流派バックラッシュの保守の論理とどのような関係にあるのだろうか。

第一に考えられるのは、相互補完関係である。すなわち、主流派から見れば家族の「美談」を主婦自身が語ることは、性別役割分業に基づく家族を主婦自身が肯定していることであり、主流派論者の理想とする家族像の有効性を裏付ける機能を果たしていると考えられる。他方、主婦の側にしても、家事や育児・介護の意義を広く社会に訴えていくことができるといふ解釈である。

しかし、このように一見相補的にみえる主流派バックラッシュと主婦たちのバックラッシュの関係について、個別の論点を詳細に検証すると対立や矛盾が現れる。

そのような緊張が見られる例が、まさしく「主婦」に関す

る評価の相違である。主流派の記事では専業主婦は抑圧されておらず、むしろ社会的には恵まれているという主張がなされている。「少なくとも日本のように主婦が財布を握って、家庭内の経済全般を仕切っている国では、『不平等な力関係』は当てはまらない」（日本時事評論社二〇〇三）という家計管理の観点からの主張や、「多くの主婦が夫に洋服や宝石を買ってもらったり、食べたり遊んだり、『奴隷』どころか、その逆の生活を満喫している」（日本政策研究センター二〇〇三a）などのように、主婦は経済的に豊かな状況であることなどが述べられている。主流派の記事では、家族は平等でありその内部に権力関係は存在していませんと考えられており、主婦をめぐる状況に関しては楽観的に捉えられている。

これに対して、主婦による記事は、主流派の記事とは異なり、主婦であることの葛藤や問題についてもしばしば言及されている。「専業主婦万歳！」と題されたエッセイでは、このようなタイトルが付けられているながらも「専業主婦は輝く存在ではない」と述べられている。休みなく毎日「家事に明け暮れる」様子は、「若い女の子から見たら、夢も希望もない女の姿だと映るかもしれない」というように、主婦であることのマイナス面にも言及している（田中二〇〇八）。また、「専業主婦を評価すべき」というエッセイでは、「学校の役員」を担当した時期が非常に多忙であり、「料理、掃除、整理整頓に手抜きをせざるを得なく」なったこと、そのことで「家

族には不満を持たせ、「自分自身も自責の念にかられ、ストレスを溜めがち」になったことが述べられている（広島市主婦二〇〇〇）。このように、主婦自身による「主婦」への言及のされ方は現実的であるといえる。

また、「家族の絆」として両者ともに重視する家族の共同性に関しても対立が見られる。主流派の記事では、「夫婦の役割には違いがある」「夫婦の役割分担意識が全くなくなれば、結婚の意味はほとんど無くなる」（日本政策研究センター二〇〇三b）とされ、性別役割分業が肯定されている。男女共同参画は「共働きが当然の社会にするために、男性にも女性と同じように家事と育児をさせようという思想」（林二〇〇〇）と批判されていることから、男性の家事・育児・介護への参加はそもそも念頭に置かれていない。このように家族の共同性は、性別役割分業によって成り立つと考えられている。

他方、主婦による投稿記事は、このような性別役割分業はさほど重視されていない。夫婦関係が述べられたエッセイでは、投稿者が手術をした際に配偶者が熱心に看病をしてくれ、「主人のほほが少しづつやせてきて、言葉にはしないがどんなに心配してくれているか気付いた」という記述がみられる（斉藤二〇〇六）。また、幼少時の父親との思い出として、外食中に母親に悪態をついた男性に対し、父親が「女、子供に何事だ！」と「一喝した」という出来事が挙げられている（三

好二〇〇六）。後者の記事は一見すると性別役割を描いたものとも読めるが、父親が経済的に家族を支えていたことよりも、母親と自分を「守る」という父の配慮や思いが投稿者にとって印象に残っていることがうかがわれる。このように、主婦たちのバックラッシュでは、性別役割ではなく心的交流を軸とした相互関係が念頭におかれている。

このように、主流派の支持する性別役割分業に基づく家族像は、主婦たちのバックラッシュが理想とする家族像とはむしろ全く異なる志向性を持っており、両者は潜在的な対立関係にある。前者の性別役割に基づく共同性は、後者の指摘する家族内、特に夫婦間の「思いやり」や配慮などの心的交流を必ずしも重視してはいない。それではなぜこのような対立は不可視化され、一枚岩であるかのように考えられてきたのだろうか。

5.2 女性知識人の二面性

ここで主流派と主婦たちのバックラッシュの接続を考えるにあたって、女性知識人が用いる論理の二面性に着目し、その役割について見てみたい。山谷えり子、長谷川三千子、西川京子らは、本稿の分析対象五誌のオピニオン・リーダーでもあり、五四件の記事が掲載されている。他方、「めざす会」がこれまで開催した講演会では、九回中六回が山谷を含む女性知識人を講師として迎えている。高橋史朗などの男性知識

人も招聘している中で、特に山谷を招聘した講演会については『なでしこ通信』五号・六号の二号にわたって特集が組まれており、彼女たちはバックラッシュに参加している主婦からも注目されていると考えられる。

女性知識人たちは、保守系知識人でありかつ主婦でもあるという立場の二面性を持つがゆえに、バックラッシュにおいて重要な役割を果たしている。実際、彼女たちは知識人としてこれまで男女共同参画に反対する記事を執筆しながらも、同時に、自分自身を主婦であるとも語る。例えば、西川は「私はずっと専業主婦をやってきましたので」という発言を講演会で行っており（西川・山本ほか二〇〇三）、山谷も「私の場合、育児休暇がありませんでしたので、仕事を辞めて専業主婦になりました」と述べている（山谷二〇〇四）。

一方で彼女たちは、知識人という立場で主流派の論者と同様に、家族を社会・国家の基盤とみなす論理を用いている。家族は社会の中の「一番小さな単位」（市田二〇〇三）、「日本社会の基礎となる単位は家庭であり尊重すべき」（西川・櫻井ほか二〇〇七）という記述がみられる。山谷もまた夫婦別姓問題を「私的な面や技術的な問題を超えて、実は各人の国家観までもが問われる」とし（山谷・高市・西川二〇〇二）、国家にも通じる問題であると主張している。

他方、これらの女性知識人たちは、主婦として自身の家事・育児などの経験や家族との心的交流のエピソードを語る。山

谷は対談・座談会記事のほぼすべてにおいて、夫や子ども、自分の母親・父親とのエピソードに触れており（山谷・八木二〇〇三）¹³、また長谷川も育児ノイローゼになった経験を対談で述べている（長谷川・山谷二〇〇四）。

このような女性知識人たちの論理が二面性を持つがゆえにみられる特徴として、個別具体的な家族のエピソードがそのまま社会・国家の文脈へと接続されるという点があげられる。

私の家も、母がお雛さまの時期にはちらし寿司を作ってくれたり、端午の節句には菖蒲湯を立ててくれたりしました。（中略）節句のお祝いはずべて、一種の「祈り」です。伝統行事を通じて、わが子の幸せだけでなく、連綿と流れる日本民族の幸せをも祈る。（山谷・林二〇〇三）

このように家庭で行った伝統行事に関するエピソードが、そのまま「日本民族」へと「自然に」接続されているのである。

それでは、主婦と知識人という二面性を持つ女性知識人の論理は、どのような役割を果たしているのだろうか。

主流派バックラッシュと主婦たちのバックラッシュに潜在する対立は、クリティカルな問題である。主流派の最終的な目標が男女共同参画社会基本法の廃止にある一方で、主婦たちが主張する家事・育児・介護の意義や価値の社会的承認は、

このような主流派の目標だけによって達成されうるものではない。両者の見解の相違は、バックラッシュ内部の軋轢となりうるほどの重要性を内包している。

女性知識人の論理はこの相反する両者を媒介し、あたかも連続性を持つかのように見せる役割を有している。家事や育児などの経験を社会や国家を重視する保守の論理の中に位置づける彼女たちの主張は、個別具体的な家族のエピソードやケアの経験について言及する主婦たちの論理と類似し、他方で、家族と社会・国家を連続するものとして捉える主流派の論理とも類似している。知識人であるがゆえに社会的影響力が大きく、プレゼンスも高い女性知識人たちの言説が存在することにより、主婦たちの主張もまた、社会や国家という観点から家族を擁護しているかのように見えてしまうのである。

5・3 主婦たちを取り巻くパラドックス

これまで、バックラッシュは一枚岩と捉えられ、バックラッシュに参加する主婦たちは主流派の論者たちと利害関係が一致しているとされてきた。しかしながら、主婦や家族の同性の二つのトピックについて比較することにより、主流派と主婦たちが潜在的な対立関係にあることが明らかとなった。この相反する両者を媒介する役割を果たしているのが、知識人と主婦双方の立場および論理の二面性を持ち、個別具

体的なケアの経験を直接、国家の文脈へと位置づける女性知識人の存在であった。バックラッシュがこのような構造を持つがゆえに、それ自体ではなら保守主義的な要素をもたない主婦たちの家族に関する言説に、保守主義の言説との擬似的な連続性が想定されているのである。

男女共同参画へのバックラッシュをこのような構造として捉え直すと、バックラッシュに参加している主婦たちは、家庭内の家事や育児・介護といった営みを重視するがゆえに運動へ参加しているにもかかわらず、それらの価値を必ずしも重視しない主流派の論理に囲い込まれ、その結果として男女共同参画に対して有していた当初の問題意識を運動へと効果的に繋げることができないというパラドックスに陥っているといえる。

6 おわりに

本稿では男女共同参画へのバックラッシュに参加する主婦たちに着目し、主流派バックラッシュとの「家族の価値」に関する比較を行った。その結果、これらの主婦たちは家族へのケアに関心を持つているにもかかわらず、知識人と主婦という立場および論理の二面性をもつ女性知識人たちの言説の存在により、保守の論理との擬似的な連続性が想定されていること、バックラッシュがそのような構造を持つがゆえに、

主婦たちはその関心を運動へと効果的に繋げられないというパラドックスに陥っていることが明らかとなった。これらのことは、以下二つの意義があると考えられる。

一つ目は、バックラッシュを考えるにあたって、新しい担い手モデルを提示したことである。第二節で概観したように、バックラッシュの担い手はこれまで、政治志向や利害意識、不安感情という三つのモデルで説明されてきた。しかしながら、バックラッシュを担う主婦たちからは、これらとは異なるモデル——家族との情緒的つながりやケアを重視するモデルを提示したといえるだろう。

二つ目は、フェミニズム研究にも通ずる議論の地平を拓いたことである。これらの主婦たちにはバックラッシュとして切り捨てられない側面がある。私的領域で女性が担うケアに対する評価の低さを批判的にとらえる主婦たちの問題意識は、バックラッシュと対立構図で捉えられてきたフェミニズムと親和的である。しかしそれにもかかわらず、この点に関しては、フェミニズムの立場から主婦のバックラッシュを分析してきた論者たちは十分にすくいあげられていない。

近年、フェミニズム研究の文脈において、社会保障単位を従来の「家族」からケアの担い手／受け手というユニットへ移行する議論を展開するフェミニズム法学者M・ファインマン (Fineman 1995 = 二〇〇三) や、今日のリベラルな思想的・社会的基盤となっている正義論を、依存やケアの観点から再

検討するE・キティ (Kitay 1999 = 二〇一〇) のように、ケアの倫理への注目が高まっている。家族の情緒的絆やケアを取り上げる際には、フェミニズム研究がこれまで指摘してきたように、家父長制・性別役割批判の視点が必要不可欠であるが、バックラッシュに参加する主婦たちの主張は、このようなケアの倫理から既存の社会制度や思想基盤を捉え返すフェミニズム研究にもつながる観点を含みうるといえるだろう。

もつとも、これらの本稿で得られた知見は、雑誌や会報・ミニコミの記事という資料的制約を受けるものである。実際に草の根保守運動を担う人びとへの聞き取り調査をはじめ、その実態により迫った事例研究が今後の課題である。

注①「ジェンダーフリー」とは九〇年代後半から教育現場を中心に使用されていた言葉である。現在、①「社会規範に結びついた男らしさ、女らしさに縛られず、自分らしさを大切にすること」、②「両性のアンバランスの関係、格差の解消」、③「男女二分法に基づく秩序体制の変革」という三つの意味で使用されている (船橋二〇〇三)。なお、「ジェンダーフリー」用語の登場過程については山口 (二〇〇六) を参照。

②バックラッシュは男女共同参画行政に大きな影響を与えた。二〇〇五年の「第二次男女共同参画基本計画」では、「社会的性別 (ジェンダー)」用語に関して「性差を否定したり」「家族やひな祭り等の伝統文化を否定することは、国民が求める

男女共同参画社会とは異なる」という注釈が新たに付け加えられ、さらに二〇〇六年には内閣府から「ジェンダーフリー」用語の使用を控える旨の通達が各都道府県に出されている。

③このような用法を初めて用いたのは、S・ファルーディである (Faludi 1991)。ファルーディは八〇年代のレーガン政権時代における保守主義的ジェンダー政策や女性敵対的な労働環境を、フェミニズムや女性に対するバックラッシュとして捉えている。

④九〇年代から二〇〇〇年代までの『産経新聞』の記事内容の変遷と保守運動に与えた影響に関しては、和田・井上 (二〇一〇) を参照。

⑤千葉県における男女共同参画条例の制定過程で生じたバックラッシュに関しては、船橋 (二〇〇三) を参照。

⑥正式な会員数は不明だが、二〇〇一年の設立大会には一〇〇〇人の参加者があり、その後の講演会でも数百人単位の参加者を集めている (日本女性の会二〇〇七)。

⑦このグループを含めた宇部市男女共同参画条例に関しては小柴久子 (二〇〇八) を参照。

⑧このような人々の存在は九〇年代後半に登場した「つくる会」以降広く知られるようになった (小熊・上野二〇〇三)。

⑨『日本の息吹』は日本会議の機関紙であり、『日本時事評論』は山口県を拠点にしている仏教団体「新生佛教教団」系列の出版会社「日本時事評論社」によって発行されている新聞である。『明日への選択』は民間シンクタンク「日本政策研究センター」発行の雑誌である。購読者層の違いによる記事の差異を考慮し、分析対象とした。

⑩「めざす会」は二〇〇三年に愛媛県松山市で男女共同参画推進条例が制定されたのを契機に、二〇〇四年に結成された。活動内容は、①自治体への働きかけ、②講演会の開催、③学習会の開催、④会報『なでしこ通信』の発行 (隔月) である。会員数は現在七五五名 (『なでしこ通信』第三七号、二〇一一年) とされているが、中心的に活動しているのは十名弱と推測される (会員四名に対して二〇〇八年五月に実施した半構造インタビュー、二〇〇八年九月・二〇〇九年一月に開催された講演会での参与観察から推測)。

⑪本稿では「家族」に関する言説の編まれ方の差異を検討するために質的分析を行う。なお、Klodear を用いた同記事の計量テキスト分析は鈴木 (二〇一〇) を参照。

⑫本稿では主婦たちが日常の経験から発言をしていることとの対称性と類似性を明らかにするために、国会議員や大学教授、ジャーナリスト、文化人などの専門家としての観点から発言する女性を「女性知識人」とする。

⑬この他に、山谷・高橋 (二〇〇三)、山谷・中條 (二〇〇五)、山谷・猪野 (二〇〇六) などの記事でも個別的エピソードに言及されている。

引用雑誌記事一覧

四十代女性会員、二〇〇五、「家族とは」『なでしこ通信』四。
長谷川三千子・山谷えり子、二〇〇四、「少子化・負け犬時に女の矜持を語る」『正論』三八八。

林道義、二〇〇〇、「ファシズム化するフェミニズム——山口県大泉副知事の恐るべき思想を糾す!」『諸君!』三二(七)。

、二〇〇二a、「そんなに家族を壊したいのか——またぞろ出てきた『夫婦別姓』推進派の仰天発言」『正論』三三三。

、二〇〇二b、「男女平等」に隠された革命戦略——家族・道徳解体思想の背後に蠢くもの」『正論』三六〇。

広島市主婦、二〇〇〇、「主婦にもできる社会貢献」『日本時事評論』一三六七。

市田ひろみ、二〇〇三、「今、男らしさ、女らしさ」『日本の息吹』平成一五年九月号。

健全な男女共同参画社会をめざす会、二〇〇五、「??おかしいぞ男女共同参画学習ガイドブック」『なでしこ通信』七。

松山市主婦、二〇〇〇、「結局は主人次第」『日本時事評論』一三六七。

三重の主婦えみ子、二〇〇七、「母親受難」『正論』四二五。

三好奈加子、二〇〇六、「父の思い出」『なでしこ通信』一一一。

日本時事評論社、二〇〇〇、「男女共同参画」の条例化は疑問！／『家族解体』と『国力衰退』を招く危険性」『日本時事評論』一三六一。

、二〇〇二、「国民の良識を信じるのか、フェミニニストの過激思想に従うのか／男女共同参画の方向性を見極める時!!」『日本時事評論』一四六四。

、二〇〇三、「北京会議と男女共同参画——その正当性を衝く(下)」『日本時事評論』一五三二。

日本政策研究センター、二〇〇三a、「『日本解体』を狙うジェンダー・フリーの『本当の恐ろしさ』」『明日への選択』二〇七。

、二〇〇三b、「ジェンダーフリー教育の恐るべき『弊害』」『明日への選択』二〇八。

西川京子・櫻井よしこほか、二〇〇七、「国家と教育の再生は『家族』から始まる——国民の覚悟も問われている」『正論』四二〇。

西川京子・山本和敏ほか、二〇〇三、「教育シンポジウム／子供が壊れる——男女共同参画の問題点／『育児の社会化』が子供を壊す」『日本の息吹』平成一五年一〇月号。

齊藤孝恵、二〇〇六、「夫婦の絆」『なでしこ通信』一三。

田中直子、二〇〇八、「専業主婦万歳！」『なでしこ通信』一三三。

梅岡典子、二〇〇六、「命のリレー」『なでしこ通信』一四。

八木秀次、二〇〇一、「夫婦別姓の導入に反対しよう！」『日本の息吹』平成一三年十月号。

山谷えり子、二〇〇四、「私の使命は教育・家族・国なおし」『明日への選択』二二八。

山谷えり子・林道義、二〇〇三、「家族崩壊を許すな」『諸君！』三五(四)。

山谷えり子・猪野すみれ、二〇〇六、「目指すのは男女共同『家族社会です』」『正論』四〇七。

山谷えり子・中條高德、二〇〇五、「男女共同参画の欺瞞と驚愕の性教育」『正論』四〇二。

山谷えり子・高市早苗・西川京子、二〇〇二、「クタブレ『夫婦別姓』——ネコ撫で声の『男女平等』に騙されるナ！」『諸君！』三四(三)。

山谷えり子・高橋史朗ほか、二〇〇三、「国自ら国を滅ぼす——子育て支援策の大愚」『正論』三七〇。

山谷えり子・八木秀次、二〇〇三、「フェミニズム批判対談 国家・社会規範・家族の解体に税金を使うな！」『正論』三六六。

参考文献

- Cudd, Ann. E., 2002, "Analyzing Backlash to Progressive Social Movements" *Superson, Anita and Cudd*, Ann. E. Ed., 2002, *Theorizing Backlash: Philosophical Reflections on the Resistance to Feminism*, Rowman&Littlefield, 3-15.
- 江原由美子, 二〇〇七, 『ジェンダー・フリー』のゆくえ』友枝敏雄・山田真茂留編『DoJ'nシオロジ』有斐閣 一七一—一九六。
- Faludi, Susan, 1991, *Backlash: The Undeclared War Against American Women*, Anchor Books.
- Fineman, Albertson, Martha, 1995, *The Neutered Mother: the Sexual Family and Other Twentieth Century Tragedies*, Routledge. (上野千鶴子・穂田信子・速水葉子訳, 二〇〇三, 『家族・積みすぎた方舟——ポスト平等主義のフェミニズム法理論』学陽書房)。
- 船橋邦子, 二〇〇三, 『条例をめぐる『攻防』から見てきたもの——今後を展望するために』『女性学』一一: 三七一—四九。
- 細谷実, 二〇〇五, 『男女平等化に対する近年の反動はなぜ起きるのか?』『世界』七三八: 九六—一〇五。
- 伊田広行, 二〇〇六, 『バックラッシュの背景をさぐる』日本女性学会ジェンダー研究会編『Q&A 男女共同参画/ジェンダーフリー・バックラッシュ——バックラッシュへの徹底反論』明石書店: 一七六—一八六。
- 伊藤公雄, 二〇〇三, 『バックラッシュの構図』『女性学』一一: 八—一九。
- Kitay, Feder, Eva, 1999, *Love's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*, Routledge. (岡野八代・牟田和恵訳, 二〇一〇, 『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社)。
- 小柴久子, 二〇〇八, 『特性論に基づく男女共同参画条例制定とその後の逆転——宇部市の事例』『女性学』一六: 五二—一六七。
- 日本女性の会編, 二〇〇七, 『家族の絆を守るために——女性も元気に国づくり人づくり』, 日本会議事業センター
- 牟田和恵, 二〇〇六, 『ジェンダー家族を超えて——近現代の生/性の政治とフェミニズム』, 新曜社。
- 小熊英二・上野陽子, 二〇〇三, 『癒し』のナシヨナリズム——草の根保守運動の実証研究』慶應義塾大学出版会。
- 岡野八代, 二〇〇五, 『ジェンダーの政治——何が見失われているのか』木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル——バックラッシュ現象を検証する』白澤社, 五五—七四。
- 佐藤文香, 二〇〇六, 『フェミニズムに苛立つ『あなた』へ——怒り』はどこへ向かうべきなのか』『論座』一三一: 二二—二二七。
- 鈴木彩加, 二〇一〇, 『主婦』たちのジェンダーフリー・バックラッシュとフェミニズム』, 大阪大学大学院人間科学研究科修士論文。
- 竹信三恵子, 二〇〇五, 『やっぱりこわい? ジェンダー・フリー・バックラッシュ』木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル——バックラッシュ現象を検証する』白澤社, 一九—三四。
- 和田悠・井上恵美子, 二〇一〇, 『産経新聞』にみるジェンダーバックラッシュの発想と論理』『インパクション』一七四: 七—一八〇。

山口智美 二〇〇六、『ジェンダー・フリー』論争とフェミニズム運動の失われた一〇年』『バックラッシュ！』双風舎、二四四―八二。

(すずき あやか・大阪大学大学院人間科学研究科博士課程)

Female Backlash against Gender Equality in Japan

— From the Analysis of Conservative Discourse on “Family Values” —

Ayaka SUZUKI

Graduate School of Human Sciences

Osaka University

e-mail: ayaka.s.45@gmail.com

Conservatives and conservative associations have attacked the 1999 Basic Law for a Gender-equal Society, whose aim was to correct gender discrimination and the gender gap from 2000. Today, this force is called “Backlash”, and is supported by housewives at the grassroots. Are these women opposed to gender equality, and if so, why? This paper explores the reason why some housewives join the backlash, and examines gender politics in that backlash. For this purpose, we analyze conservative discourse in magazines, newsletters of various associations, and communication magazines of grassroots movements.

As a result of the analysis, we find the following two points. Firstly, while abstract arguments that regard the family as the foundation of society and of the state account for the vast majority of articles, housewives however emphasize individual experiences, such as communication among family members, housekeeping and child-raising. Secondly, conservative female intellectuals are observed to have two facets, that of the intellectual, and that of the housewife. They describe the stories of their own experiences in the family as a housewife, and also discuss their value from the point of view of society and state.

In conclusion, we examine the internal politics of the backlash. There are conflicting opinions between housewives and the mainstream of the backlash about the family model. However, the two facets of conservative female intellectuals conceal the conflict, and assume a pseudo-continuity between housewives' individual experiences and conservative discourse.